あだし野の露**消ゆる**(下二・体)ときなく、鳥部山の煙(けぶり)**立ち去ら**(四段・未)で(接助)
のみ、**住み果つる**(下二・体)ならひ(形・ク活用・用)ならば(断定「なり」未・接助)、いかに、もののあは
れもなからん(推量「む」体)。世は定めなき(形・ク活用・未)こそ(係助)、いみじけれ(形・シク活用・已)。
命**ある**(ラ変・体)ものを**見る**(上二・体)に、人ばかり久しきはなし(形・シク活用・体)。かげろふ
の夕べを**待ち**(四段・用)、夏の蝉の春秋を**知ら**(四段・未)ぬ(打消「ず」体)も**ある**(ラ変・体)ぞ(係助)かし(終助)。

つくづくと一年を**暮らす**(四段・体)ほど(副詞)だに(副助)も、こよなうのどけし(形・ク活用・用・ウ音便)
や(間助)。**飽か**(四段・未)ず(打消「ず」用)、惜しと**思は**(四段・未)ば(形・シク活用・終)、千年を**過ぐす**(四段・終)とも(接助)、一夜の
夢の心地こそ(係助)**せ**(サ変・未)め(推量「む」体)。**住み果て**(下二・用)ぬ(打消「ず」体)世に、みにくき姿を
待ちえ(下二・用)て何かは**せ**(サ変・未)ん(推量「む」体)。命長ければ辱多し(形・ク活用・已)。長く(形・ク活用・用)とも(接助)
四十に**足ら**(四段・未)ぬ(打消「ず」体)ほどにて**死な**(ナ変・未)ん(推量「む」体)こそ(係助)、めやすかる
べけれ(推量「べし」已)。そのほど**過ぎ**(上二・用)ぬれ(完了「ぬ」已)ば(接助)、かたちを**恥づる**(上二・体)心も
なく、人に**出でまじらは**(四段・未)んことを**思ひ**(四段・用)、夕べの陽に
子孫を**愛し**(サ変・用)て、**さかゆく**(四段・体)末を**見**(上一・未)んまでの命を**あらまし**(四段・用)、
ひたすら世を**むさぼる**(四段・体)心のみ深く、もののあはれも
知らず(四段・未)**なりゆく**(四段・体)なん(係助)、あさましき。

あだし野の露が消える時がなく、鳥部山の煙が立ち去らないでいるように、
人が生き続ける習わしであるのならば、どんなに、情緒もないだろう。この世は無常だからこそ、素晴らしいのである。
命のあるものを見ていくと、人ほど長く生きるものはいない。かげろうが
夕暮れを待つことなく(死んでしまい)、夏の蝉が春や秋を知らない(で死んでしまう)ということもあるのだ。
しみじみと一年を暮らす時でさえ、この上なく、ゆったりとしていることだよ。
(それなのに)満足せず、命を惜しいと思うのならば、千年を生きたとしても一夜の夢のように
儚い思いをするだろう。住み続ける事のないこの世で、醜い姿を待って迎えてどうするのだろう。
(いや、どうしようもない。)長く生きると恥をかくことも多い。(だから)長くても
四十歳にならないうちに死ぬことが、見苦しくないだろう。
その頃を過ぎてしまうと、容貌を恥じる気持ちもなく、人の中に出て行って付き合うようなことを願い、夕暮れの太陽のように先の短い命で、
子や孫をかわいがり、(その子や孫が)栄えゆく先を見届けるまでの命を欲しがり、
ただ、もうこの世の利益や欲望に執着する心ばかりが深くなって、ものの情緒も分からなくなっていくのがあきれたことである。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/